作業の丸投げ？　思考の補助？　より良い創造？

ワーク
座談会

AI活用の“境界線”を考える

日常生活や学習で、AIを使いこなしていく生徒たちに、どう向き合えば良いのでしょうか？
それぞれのお立場でAIを活用している先生方４人にお集まりいただき
「生徒のAI利用をどこまで許せるか」を切り口に、ワークショップと座談会を実施しました。
今、本当に育むべき「考える力」について、白熱した議論の様子をレポートします。

ご参加いただいた先生方

安宅 隆先生
三浦学苑高校
（神奈川・私立）
数学科を担当。また進路指導グループのリーダーを務める。AIについては ChatGPTに限らず、Geminiなどさまざまなツールを使いながら、授業や業務にどのように活用できるか試行錯誤中。

村田菜月先生
生田東高校
（神奈川・県立）
数学科と情報科を担当。赴任して1年目。研究ICTグループに所属し、ICT利活用授業研究推進校として、学びの質を深めるための具体的なICT活用メソッドを、多角的に模索している。

鈴木真人先生
芝国際高校
（東京・私立）
数学科を担当。また探究開発委員を務める。授業の学習効果向上と校務の効率化にAIを活用。さらに学内で教員研修をみずから主催し、AI人材育成にも注力している。

鰐川妃奈子先生
西湘高校
（神奈川・県立）
家庭科を担当。またキャリアガイダンスグループのサブリーダーを務める。授業に加えて、小論文添削など進路指導にもAIを活用中。普段は、AIに個人的な悩み相談をすることもあるそう。

取材・文／塚田智恵美　撮影／平山 諭

読者の先生方も、一緒に考えてみませんか？

ワーク1

御校の生徒はどんなシーン・目的でAIを活用するでしょう？

【ワーク1の流れ】

- 付箋を用意して、1枚につき1ケース、具体的なAIの活用例を書き出してください。
- 特定の生徒を想像し「あの子ならどう使うだろう？」と考えていただくのもおすすめです。
- 教員として守ってほしいルールはいったん忘れ、生徒の立場で考えてみてください。

宿題の代行や面接準備…。生徒のリアルを想像する

ICTグループや進路指導担当など、日々さまざまなシチュエーションでAI活用を進めている先生方にお集まりいただき、和やかな雰囲気で始まったワークショップ。冒頭、進行役から高校生のAI利用率が7割を超えている現状（12ページ）や、ネット上にあふれる高校生のリアルな声がシェアされた。日々の学習利用として「ChatGPTで作ったレポートが、先生にバレた」「英作文の添削に使用した」「レポートの参考文献としてChatGPTと書けなくて困っている」「宿題をやらせたら回答が間違っていた」など、悩ましく生々しい実態が浮かび上がる。

さらに、生徒たちは授業や学校行事でもAIを巧みに使いこなしているようだ。英語のプレゼンで、難易度の高い表現について、AIとやりとりして、自分が発表しやすいレベルに調整したケース。また、ディベートで相手からの反論を予測させて回答を準備したりするケースもあるという。文化祭の台本作りや修学旅行の企画書、さらには友人に送付するLINEの文章作成まで、AIは高校生たちの日常に深く浸透している。

志望理由書の作成や面接準備という、受験における活用例も多い。一方、ネット上には添削側や面接官の嘆きも多く投稿されている。「AIで作った文章は一発でわかる」という声の通り、「多角的な視点」「架け橋」といったAIがよく使う表現が頻発したり、内容が綺麗すぎて面接で深掘りすると自分の言葉で説明できなかったりといった問題点が共有された。

こうした実態を踏まえ、いよいよワークを始めることに。まずは「自校の生徒は、どんなシーン・目的でAIを活用するか？」を考え、1ケースごとに、付箋に書き出していく。先生方には、一度「教員」としての立場やルールを脇に置き、リアルな生徒の顔を思い浮かべながら、生徒がどこでAIを使うかを考えていただいた。先生方の手は止まることなく、次々と付箋に事例が書き出されていく。

進路指導に携わる安宅先生は、「志望理由書の作成」におけるAI活用をさらに細分化した事例を記入した。例えば「志望理由の書き方を調べる（検索）」「志望理由書に必要なアドミッション・ポリシー（AP）やディプロマ・ポリシー（DP）を読み込ませる（論理の補完や情報の補足）」「読み込ませた志望理由書をAP・DPに基づいて評価させる（評価や推敲）」というように、志望理由書作成のあらゆる工程における、AIの活用しどころが挙げられた。

一方、家庭科を担当する鰐川先生は、生徒の視点に寄り添った、生活面の事例を挙げたのが特徴的であった。「恋愛相談」「日々の宿題で、問題を入力して、答えと解説を出力させる」「友人同士のコミュニケーションで、LINEの返信例を作ってもらう」「買い物で、おすすめの商品を選んでもらう」など、多岐にわたるリアルな日常の活用法が並んだ。

読者の先生方も、一緒に考えてみませんか？

ワーク2

付箋に書いた活用例を「許せる／許せない」で仕分けしてみてください

【ワーク2の流れ】

- 悩むものは中間に置いてOKです。
- 仕分けの眼差しとして「これからの社会で自校の生徒にはどうあってほしいか？」を考えてみるのもおすすめです。
- 仕分けをしながら気づいたことを、メモしてみてください。

スライド作成の丸投げと投資判断の丸投げ

ワーク1で書き出した生徒視点でのAIの活用例について、ワーク2では教員の立場で「許せる／許せない」の仕分けを行った。この仕分けは、学校のルールではなく「これからの社会で、生徒にどうあってほしいか」という教員としての願いを踏まえて行われた。

結果は明確に分かれた。悩みながら、いくつかの事例を「許せない」へ分類した安宅先生・鰐川先生に対し、鈴木先生・村田先生はほぼすべての事例を「許せる」と位置づけ、教員間のスタンスの違いが浮き彫りになった。

「許せない」ラインを引いた安宅先生と鰐川先生の共通点は、「AIの答えを鵜呑みにせず、クリティカルに考え続ける思考を守り抜いてほしい」という思いだ。安宅先生は、スライド作成の完全な丸投げを危惧し、「丸投げではAI上でタスクがすべて完了してしまいます。AIに思考をジャックされているかのようです。本当にこれでよかったのかな？論理展開は正しいのかな、という自分なりの視点が大事です」と指摘。「その人でなければ作れない『思い』が表現されたものなのかどうか。そういう視点の有無が、丸投げかそうでないかの違いかなと思っています」（安宅先生）

家庭科を担当する鰐川先生も、情報に対する生徒自身の精査の有無を判断基準に挙げている。「許せるのは、自分が情報を精査したうえでAIに頼むケース。許せないのはみずから情報や素材をもたずに、『おすすめは？』と判断を丸投げすること」と語り、すべてをAIに委ねるのではなく、考えを深めたり判断をしたりするための素材や基準は、あくまで自分自身の中にもっておいてほしいという願いを示された。「AIに頼りすぎて自分で考えることが減っているので、生徒たちには自分の言葉で考えることを大事にしてほしい。また、面接対策などでは、AIによる無味無臭の表現で満足せず、自分をより魅力的に見せる方法を探究してほしいとも思っています」（鰐川先生）

さらに、家庭科で投資について教えた際、「AIがおすすめしていたから、この銘柄を買いたい」と、AIの情報を鵜呑みにする生徒がいたことを挙げ、知識が薄い分野での危険性も指摘した。

「友達の回答を写す」のと本質は変わらない

これに対し、対照的なアプローチを示したのが鈴木先生と村田先生である。鈴木先生は「法に触れる使い方はNG、それ以外はすべてOK」と明確な方針を打ち出した。「AIがなかった時代から『友達の答えを写す』生徒はおり、AIに宿題をやらせるのと本

資料作成の丸投げは AIによる思考ジャックにならないか

質は変わらない。どれだけ禁じても、やる生徒はやる。出てきた結果がその後の教育としてより良い方向に向かえばいいのではないか」（鈴木先生）

リテラシー教育のうえで「包丁も使い方を誤れば人を、自分を傷つける。だからといって『包丁を使うな』にはならないですよね。道具自体に善悪はないので、使いながら生徒と共に良い使い方を学んでいきたい」と、体験を重視する姿勢を見せた。

村田先生も、ほぼすべての活用例を「許せる」とした。「AIは、使った後が大事。最初は丸投げでも、自分の頭の中にあるものを少しずつ言語化していくプロセスが加われば、最終的に自分の創作物になるはず」（村田先生）

ただし唯一「人を傷つけるもの」だけは許せない、と線引きした。「私の授業では、数学の問題を生徒に作らせてみんなの前で発表させることがある。そのとき、AIを通じて友達を傷つけるような文章問題を出力しないように、意識させている」と話し、生徒の倫理観に働きかけながら向き合う姿勢を見せた。

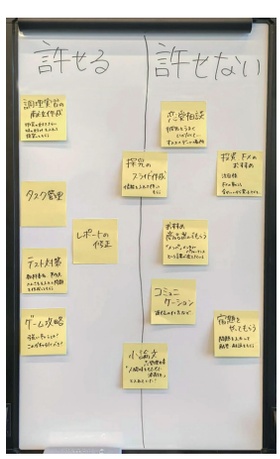
表面的な活用の是非を超えて

仕分けの理由を共有しながら、議論はさらに熱を帯びた。安宅先生が「AIを使わないという選択肢はない。何でも禁じるのではなく、使いこなせるようになってほしい」と語れば、鈴木先生は評価設計について、「AIを使った成果物を評価する一方で、それをAIが使えない状況下で問い直し、その答えでも評価する。この2つの評価軸を教員側が設計できれば、生徒ごとの習熟度に合わせた最適な指導へと柔軟に移行できる」と言及した。

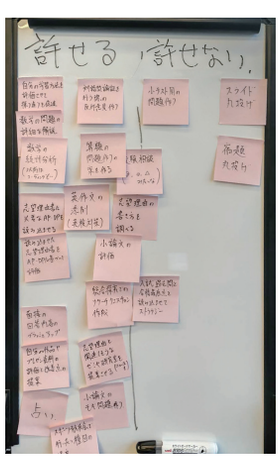
議論を通じて、先生方の間には「リテラシーとして最低限指導すべきところはどこか？」「AIを活用した後に生徒が使い方を振り返り、より自分を成長させていくように使い方を再検討するようなプロセスは、どうすれば生まれるか？」といった新たな問いが次々と生まれた。議論は、表面的な利用の是非を超え、生徒の「考える力」と「生きる力」はどこで育まれるか、に及んでいく。

? AIに判断を委ねると危険な分野は何か

「思考の主体性」を守りたい

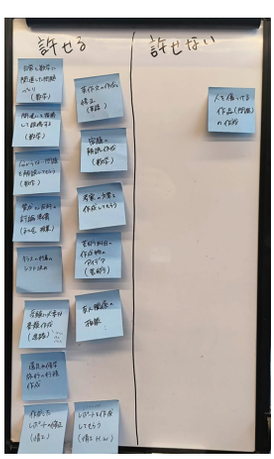


宿題を自力で解いた後の確認としての利用は許せますが、最初から解かせる丸投げは許せません。また、ゼロからスライドを作らせることには迷いがあります。最近はAIチェッカーが普及し、どんどん「人間味のある答え」に寄せられるのも迷いどころです。

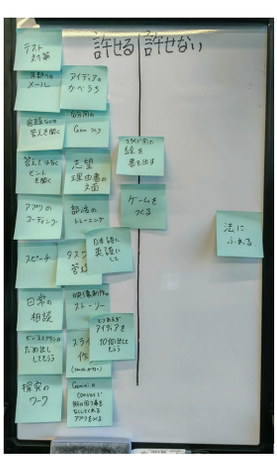


検索補助や、ゼロからのアイデア出し、評価ツールとして使う分には生徒にプラスとなると考えます。一方、すべてを任せる丸投げは許せません。また、情報の正確性が不十分なため、入試など生き方に関わる重要な判断をAIに委ねることには不安があります。

あらゆる活用を前提に「その後」を考えたい



基本的にAIの利用は許容しますが、人を傷つける作品を作ることは許せません。重要なのは、使った後のプロセスです。最初は丸投げでも出力結果に妥協せず、自分の考えを少しずつ言語化して、最終的にみずからの手で作り上げる過程があるなら良いと考えています。



AI利用を制限する基準は、法に触れるかどうかです。「絵を描く」「ゲームをつくる」を境界線上に置いているのは、著作権に触れる可能性があるから。法律の知識とリテラシーをもつことを前提とし、最終的に生徒の成長につながるのであれば問題ありません。

読者の先生方も、一緒に考えてみませんか？

座談会

AI活用を前提に これから育てたい力や これからの教育現場とは？

【座談会のポイント】

- 仕分けをしながら気づいた点は？
- 生徒が「AIを使って作成した」アウトプットをどう評価すべき？
- AI活用を前提に、どう授業や評価方法を再設計できるか？
- これから教育現場が担うべき役割は？

アウトプットの質だけでは評価できない時代に

ここからの座談会では、仕分けを通じて浮き彫りになった気づきや疑問を基に、対話し、議論を深めていくことに。生徒のAI利用を完全に止めることはできない。これは教員4人の共通見解だ。では、AI活用によるアウトプットを前提としてどのような学びが必要だと考えているのか。

鈴木先生は、丸投げで終わらない課題の出し方や、学習のシステム作りが教員の役目だと語る。「例えば『日本に死刑が必要であるか』という難しい問いに対し、死刑制度や執行についての知識の補充に、AIを使うことはできます。しかし、知識を得るだけで、自分の意見が決まるわけではありませんよね。まずはAIなしで意見を言う機会を作ったり、賛成・反対の両方の立場に立たせたりするプロセスを踏ませることで、自分なりの立場や言葉が育っていくのだと思います」（鈴木先生）

一方、情報の授業も担当する村田先生は、評価方法を変えるアプローチを提案する。「レポート課題ではAIへの丸投げが懸念されます。そこで、最初は自力で書かせ、そのうえで、AIを使ってより良い修正ができるプロンプトを渡す。自力で書いたレポートと、AIで完成させたレポートの『伸びしろ』を評価するよ、と伝えることで、生徒たちには一旦自分で考えてみる意味が生まれます」（村田先生）

安宅先生は、AIにはなかなか生み出せない、共感という物差しを意識させたいと語る。「AIを使えば綺麗で理路整然とした志望理由書ができます。でも最終的に社会で求められるのは『この人と働きたいか』『言葉に心が動かされるか』。頭でわかることと心で感じることは別だと伝えて、心を動かすというところに自分ならではの工夫をしてほしい」（安宅先生）

AIを使って作った完成品の出来栄えではなく、AIを利用しながらどう修正し、自分の言葉で心を動かすかという「先」のプロセスへ、評価の重心は移っている。

評価すべきは成果物か プロセスか

AIによるショートカットと思考の寄り道を作ること

アウトプットの質が底上げされる反面、思考プロセスには新たな課題も生

じている。安宅先生は探究の思考を「U」の字の形に喩えて危惧を口にした。「探究には、深く潜り本質と向き合い、抽象化を経て、自分なりの答えを出す、Uの字を描くような思考プロセスがあります。しかしAIを使うと、思考が直線を描き、ショートカットしてもっともらしい答えにたどり着いてしまうような気がする」（安宅先生）

効率良く正解に辿り着けるからこそ失われる、寄り道の価値。鰐川先生は探究の授業での事例を紹介した。「ラーメンを栄養学の観点から探究していた生徒が『一から出汁を取りたい』と、かつおや煮干しから出汁を取り始めました。そんなことをしなくてもAIで知識は得られたかもしれません。でも、発表では8割の生徒が、その子のアウトプットが面白かったと投票しました。寄り道の結果、人の心を動かすものが作れたのではないでしょうか」（鰐川先生）

安易なショートカットを防ぎ、試行錯誤を経験するにはどうすべきか。鈴木先生は意図的な寄り道のステップを提案する。「直線的になりがちなテーマでも、反対意見を入れて分岐させるなど、考えるステップを意図的に作ることが重要です。深掘りの練習として、まずはAIに『この意見を批判して』と聞く工程を挟むのも、有効です」（鈴木先生）

AIと共にある教育現場では、あえて立ち止まらせたり、分岐させたりする体験の設計力が、より求められるのかもしれない。

AIで思考が直線化する生徒と寄り道できる生徒の違いは

論理的思考力はもはや前提「選ぶ力」「動く力」を

これだけAIが普及した今、必要な「考える力」とは何だろうか。

村田先生は「許せる／許せないの基準が分かれたのも、接している生徒の学力や環境が違うからなのでは」と語る。「思考が苦手な生徒には、AIの回答を足場にして考え始めることも『考える力』を育む一歩になる。一方、ある程度自力で思考できる生徒は、アウトプットの質やスキルを高めるためにAIを使う。個に応じて、考える力の段階や意味合いは違うのかなと思った」（村田先生）

鈴木先生は「これからは、考える力以上に『決断して行動できる力』が重要になると思う」と述べた。鰐川先生も「家庭科は答えがない教科。多様性の時代で、結婚するか、子どもをもつかなど、自分自身で選んでいく必要がある。その『選ぶ力』こそが、考える力なのでは」と語る。安宅先生は、能力のパラダイムシフトが起きていることを指摘する。「『考える』こと自体を再定義しなければならない。『論理的思考力』はもはやベースであり、どう決断するかが上位に来ている」（安宅先生）

AIが提示する選択肢から「どうしたいか」を選び取り、決断し行動する力。そしてAIにはない「共感」や「人間らしさ」を込める力。「考える」という言葉の解像度が少しずつ上がっていく。

AIが情報や論理を担う時代に人が育つとはどういうことか

「答え」を出すよりも、考え続けたい「問い」を

ここまでAI活用の「許せる」「許せない」という境界線を切り口に、これから育てたい生徒の力や、教育現場のあり方について考えを深めてきた。座談会の最後に、「これまで教育現場が育成しようとしてきた論理的思考力は、AIの登場によって、誰もがもちうるベースの力となるだろう。これからの『考える力』を再定義しなければならない」という言葉が挙がった。それは同時に、AI時代の教員の役割を、再定義することでもある。AIで思考をショートカットし、誰もがある程度整ったアウトプットを出せる時代に、教員の役割とは何だろうか？世の中の多様なものを見せ、選択肢を増やす役割、現実世界のプロフェッショナルと生徒をつなぐハブ、とりあえずやってみようと生徒の背中を押す役割、といった意見が交わされた。

ただし、この場では何か一つの結論を出すことはせず、それぞれがすっきりした結論の出せないまま閉会となった。対話すればするほど、簡単には答えを出せない「問い」が生まれる。効率良く正解らしきものに辿り着ける今だからこそ、このモヤモヤとした気持ちを抱えたまま、問いに向き合い続けること。それは、AI時代の教育現場に必要なプロセスにも通じるのかもしれない。

学校でどんな体験を提供すべきか？これからの「より良い体験」とは？

インターネットの登場時に予想されたのとは、まったく異なる未来が今広がっています。先が予想もつかない今、学校が提供すべき価値とは、今日のように人が集まり、答えが出るかわからなくても、一つの空間を共有して共にアイデアを発案し合う「体験」なのでは。学校という場所で生徒にどのような体験をさせるべきか、今の時代におけるより良い体験とは一体何なのかという問いを、改めて考え続けたいと思います（鈴木先生）

人間にしかない価値は？それをどう教育機関で育てるのか？

知識の量でAIに勝つことは、もはや不可能です。では、人間はどこでAIに勝負できるのでしょうか。私は、AIには出せない「人間味」や、一人ひとりの個性を大切にしていくことが、これからの時代に求められていると考えています。人間味や個性は、自分を他者にアピールするためにも、大切なことのはずです。ただし、それを、教育機関の中でどう育み、伸ばしていくのか。まだまだ考えていきたいテーマです（鰐川先生）

そもそも「学校」とは何か？変化の渦中に、教室で何をするか？

これからの新しい教育がどのような形になるのか、誰にもわかりません。社会は今まさに変化しており、私たちが勝手に未来を予想して教育を進めるよりも、AIの進化のスピードの方がはるかに速いことを実感しています。そんななかで「学校」というものの存在意義や価値を、改めて考え直す必要があるのかもしれない、と座談会を通じて感じました。どれだけ役割や意義が変わろうとも、私は生徒の背中を押す存在でいたいです（村田先生）

AIに負けない「人間力」とは？それを養うプロセスは？

これまでの教育現場で重視されてきたものが、AIの台頭により、根底から崩れそうです。これからはトライする力やチャレンジ精神が重要になりますが、それらは学校以外の場所でも学ぶことができます。そうなると、教育機関が存在する意義や、あえて「学校」という場である必要性は何なのか。学校や教育は本当に必要なのかという、根源的な問いを今日感じました。簡単に答えを出さず、考え続けてみたいです（安宅先生）